

教育過程におけるパフォーマンスのあり方についての研究

著者	金平 文二, 鈴木 裕子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	32
ページ	83-90
発行年	1992
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008847/

教育過程におけるパフォーマンスの あり方についての研究

金平文二*・鈴木裕子**

(平成3年9月30日受理)

Research of Self-Performance in Educational Situations

Bunji KANEHIRA and Yuko SUZUKI

(Received September 30, 1991)

I. 研究の目的

対人関係において自己表現(パフォーマンス)を適切に行うことは、自分を相手に十分理解させ、また、相手にいろいろな影響を与える点できわめて重要なことである。とくに教師・教諭・保母はそのかかわっている子どもたちにさまざまな影響を積極的に与え、子どもたちの持っているすぐれた素質・能力を引き出し、さらにそれらを伸ばしていくことが期待されている。

自己表現の形には、言語的なもの(ことば・かけ声・歌唱など)と非言語的なもの(行動・身ぶり・動作・表情・態度など)とがあるが、子どもたちに大きな影響を与えるのは、それらを含めた教師・教諭・保母の人格的・全体的な表現による働きかけである。

そこで、パフォーマンスという自己表現活動について、将来、子ども関係の仕事にたずさわろうとする児童学関係の学生がどう考えているかを探るために質問紙調査を行い、また、実際のパフォーマンス活動によって子どもたちにどんな影響がみられるかを考察しようとするのが本研究の目的である。

II. 研究の方法

研究の方法として、パフォーマンスについての質問紙法調査とパフォーマンス活動場面の観察調査とを適用した。

1. パフォーマンスについての質問紙法調査

将来、幼稚園教諭、保育所保母などを志望すると予想される児童学科学学生に対して、パフォーマンスに関連すると思われる質問項目を作成し、それらにどのような考え方、行動傾向を示すかを知るために質問紙法調査を

実施した。調査期日：平成2年6月、対象者：106名、回収率98.5%、質問分野 I. 自己表現の必要性、II. 自己表現による集団の活発化、III. 自己表現による集団の指導の3分野について質問項目20問を作成した。

2. パフォーマンス活動場面の観察調査

観察調査のためのグループ(東京家政大学児童学科・通園保育グループ)として、3名の保育者と11名の通園児(2才~3才)を対象として、保育活動の4つの遊び場面を設定し、それぞれの場面ごとに、保育者中心・子ども中心の状況を与えて遊戯指導を行った。各場面全体をビデオ装置によって録画し、子どもたちの活動状況について、あらかじめ作成した行動観察リストによって行動を分析した。

なお、本研究はパイロット・スタディとして実施したもので、サンプル数が限られているが、本研究のデータ分析をとおして得られる結果によって、さらに、多くのサンプルについて研究を実施する計画である。

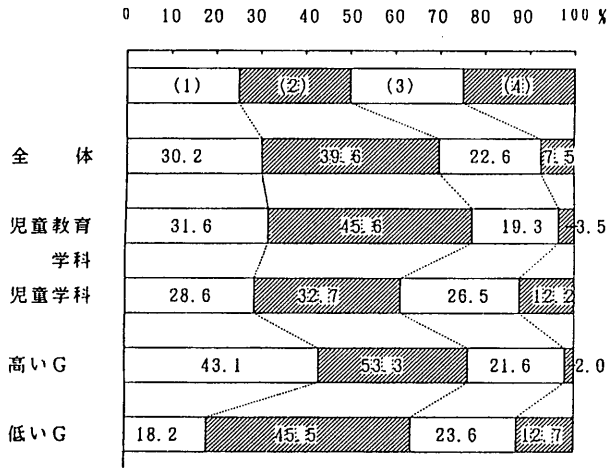
III. 結果の分析と考察

1. パフォーマンスについての質問紙法調査の結果

質問紙法調査の結果について、各質問項目ごとの単純集計を行い、度数、%を算出した。さらに、自己の性格・行動傾向・行動特徴の3つの質問項目の5つの選択肢について、外向的-内向的、積極的-消極的の程度によって5段階の得点を与え評価した。その結果によって、高得点グループH・G(合計得点14点~10点)と低得点グループL・G(合計得点9点~0点)に分け、各質問項目の度数・%を算出し、両グループの比較を行った。紙数の関係で質問項目のうち特徴的傾向がみられるいくつかの結果を紹介する。

* 児童学科 ** 保育科

(No.1) あなたは、相手に自分のことをわかってもらうとする場合、自己表現のしかたについてどうやっていますか。

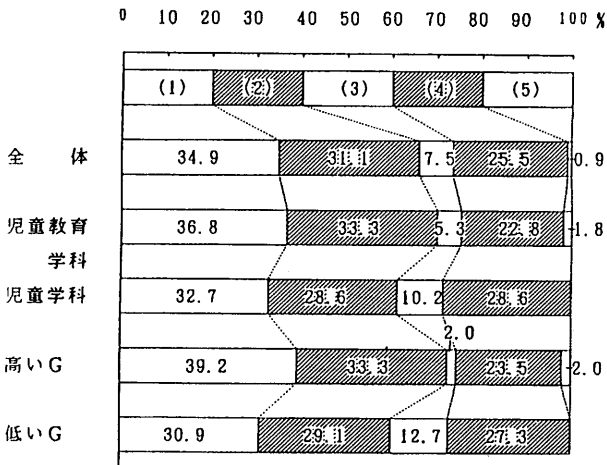


1. ことばや身ぶりなどを使って、できるだけ相手に自分をわからせるようにしており、自己表現はうまいほうだ。
2. ことばによる表現が主で、身ぶりなどはあまり使わない。
3. 自己表現のしかたがあまりうまくなく、こちらの考えが相手によくわかってもらえない。
4. 自己表現はあまり考えたことがなく、自分のことが相手にわからなくても特に感じない。

自己表現のしかたについて、全体の分布で“1.ことばや身ぶりを使う”が30.2%，“2.ことばによる表現が主”が39.6%，“3.あまりうまくない”が22.6%，“4.自己表現はあまり考えたことがない”が7.5%となっている。児童教育学科学生（以下児教という）と児童心理学科学生（以下児学という）との比較では、2.ことばによる表現

が主について、児教が児学よりかなり上回っている。しかし、自分の外向的・積極的・活動的な点の評価について、高得点グループH・Gでは、低得点グループL・Gにくらべて、自己表現のしかたについて、かなりオーバーな表現をしようとしている傾向がみられる。

(No.2) あなたが自己表現で気をつけているのはどんなときですか。

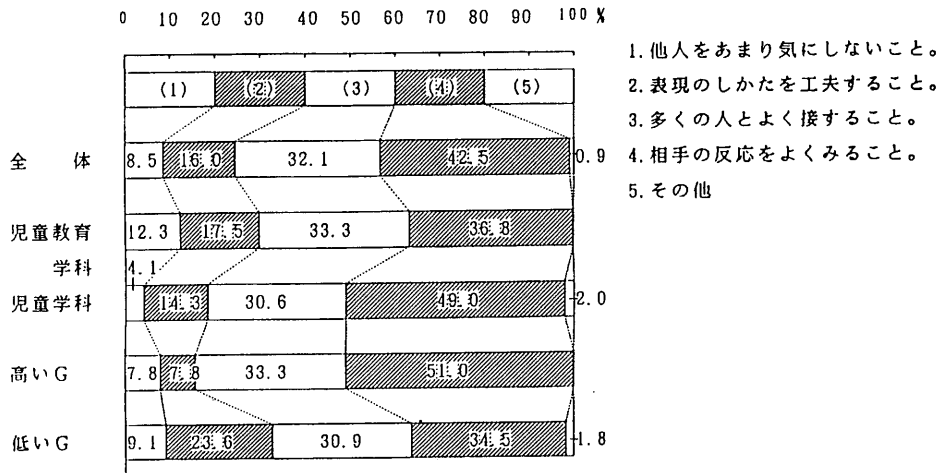


1. 自分を相手によくわかってもらいたいとき
2. 自分の断えたいことを強調したいとき
3. 相手の警戒心をときたいとき
4. 相手ととくに親しくなりたいとき
5. その他

自己表現で気をつける点について、全体の分布で、“1.自分をわかってもらいたいとき”34.9%，“2.自分を強調したいとき”31.1%、要するに自分のことを相手によく理解させたいが65%あり、そのために自己表現に気をつけるというのがかなり多い。人間関係において、自

己をよく表現することはきわめて大切なことである。高得点グループH・G（以下H・Gという）と低得点グループL・G（以下L・Gという）とを比較すると、H・Gは性格的、行動的な点からみても、自己表現についてはよく気をつける傾向が高い点がみられる。

〔No.3〕自己表現のためにはどんなことが必要でしょうか。

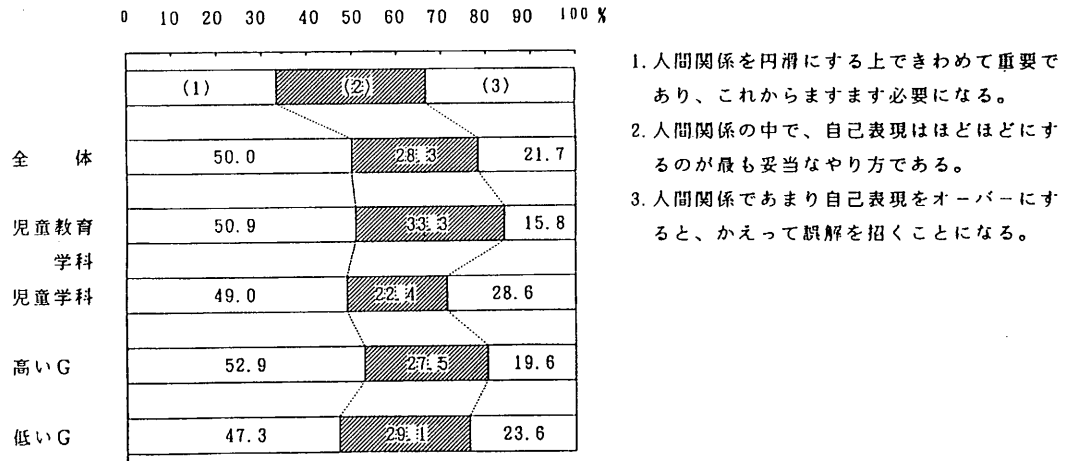


自己表現のために何が必要かについて、全体の分布で、“4. 相手の反応をよくみる”が42.5%を占め、次いで、“3. 多くの人とよく接する”が32.1%となっている。“2. 表現のしかたを工夫する”は16.0%となっており、自己表現のためには、その表現手段よりも、相手の反応をよく観察し、相手を理解して相手に応じたやりかたをすることが必要であることを示している。児教と児学との比

較では、“4. 相手の反応をよくみる”において顕著な差がある。

H・GとL・Gとを比較すると、“4.相手の反応をよくみる”においてH・Gがきわめて高く、自己表現をするには、相手の反応をよくみて、それに応じた自己表現活動をすることの必要性を示唆している。

〔No.4〕人間関係において、自己表現はどの程度必要でしょうか。

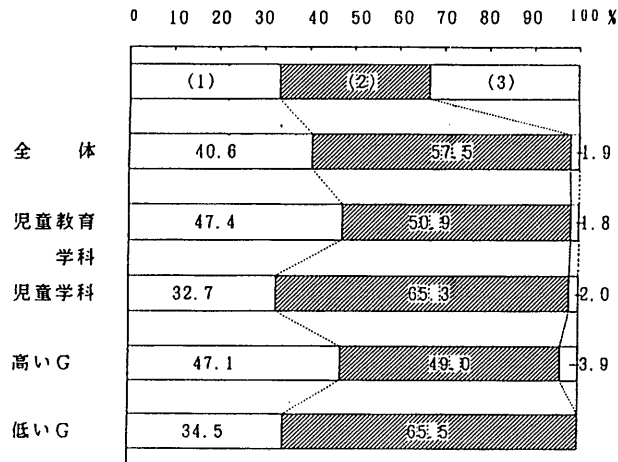


人間関係における自己表現の必要性について、全体分布で、“1. 人間関係においてきわめて重要である”とする反応が50.0%を占め、次いで、“2. ほどほどにするのが妥当”とする反応が28.3%を占めている。しかし、“3. 自己表現をオーバーにすると誤解を招く”とする反応が21.7%を占めていることに留意する必要がある。状

況に合った自己表現が適切であるということを示唆している。この点、児学がかなり高い比率を示している。

H・GとL・Gの比較では、両者間に大きな差はみられないが、自己表現の必要性は認めていても、あまり極端なやり方はのぞましくない、状況や相手によって誤解を招かないやり方を取り入れていくことが必要になる。

(No.5) 幼稚園などの子どもとの関係において、自己表現活動はどの程度必要でしょうか。

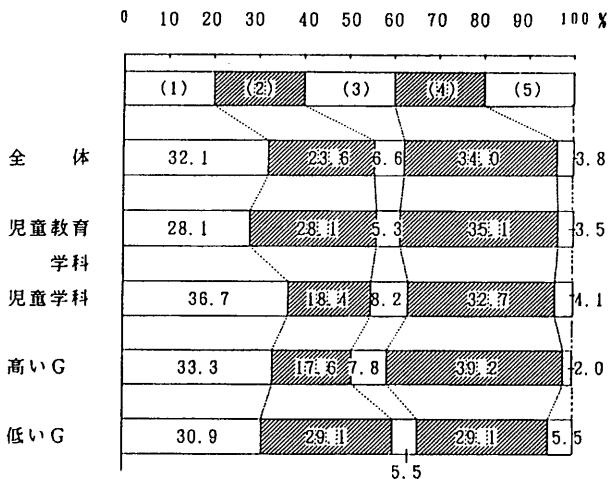


1. 自己表現活動によって、子どもたちを生き生きとさせることが必要だ。
2. 子どもの性格によって、自己表現活動を変えていくことが必要だ。
3. 自己表現活動をやると、子どもたちを萎縮させることになる。

子どもとの関係における自己表現活動の必要性について、当然のことかもしれないが、全体分布について、“2. 子どもの性格によって自己表現活動を変える”とする反応が圧倒的に多く、57.5%を占めている。“1. 子どもたちを生き生きとさせる”が40.6%を占めている。自己表現活動は、課題とする内容を相手に強く印象づけるため

に行うためのものであり、子どもの性格、状況に合致したやり方で実施することが必要であり、それによって子どもの意欲を引き出して、生き生きとした状態を作り出すことの必要性を示唆している。この点について、H・GとL・G間にはかなりの差が認められているが、対人関係のあり方は、相手に応じたやり方がとくに必要とされる。

(No.6) 子どもへの集団活動を発活化させるにはどうすればよいですか。



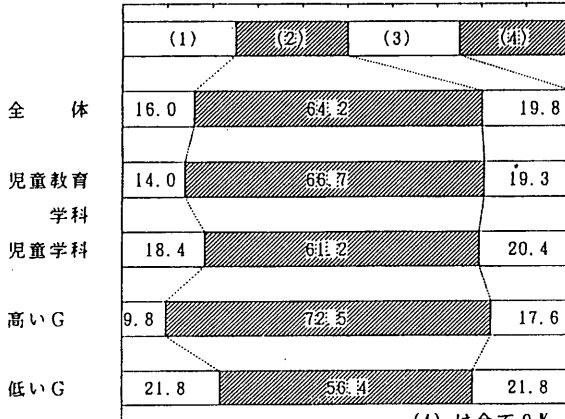
1. 子どもの中に入って一緒に遊ぶこと。
2. 遊びを刺激するようにすること。
3. 子どもを放任して自由にさせること。
4. 先生が体を動かしたり、声をかけたりすること。
5. その他。

子どもの集団活動を活発化させるについて、全体分布で“4. 子どもへの先生側の働きかけ”を必要とする反応が34.0%を占め、次いで、“1. 子どもと一緒に遊ぶ”とする反応が32.1%、“2. 遊びを刺激する”が23.6%を占め、ほぼ同じ比率であるが、要するに子どもの心を捉えて、先生から子どもを刺激するような働きかけが必要

なことを示している。自己表現というのは、先生自身の内面的・外面的な人格全体の表現であり、これとおして子どもの可能性を積極的に引き出そうとするものであるから、子どもの集団活動の活発化のために、色々な刺激を積極的に与えることの必要性を示唆している。H・GとL・G間の反応にはほとんど差はみられない。

(No.7) 子どもの表現力を伸ばすにはどうしたらよいと思いますか。

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%



(4) は全て 0%

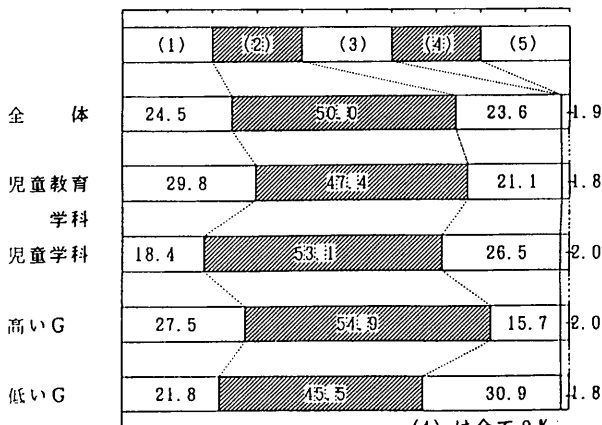
子どもの表現力を伸ばすにはどうするかについて、全体分布で、“2. 子どもをほめてよい点を伸ばす”とする反応が圧倒的に多い64.2%を占めている。子どもにとっても自分自身をよく表現して、子どもの持っている可能性を他の人にもよく理解させるといことが必要であり、そのことがさらに子どもの表現力を豊かにするうえで役

1. 子どもと一緒にいろんなことをする。
2. 子どもをほめながら、よい点を伸ばす。
3. あなた自身が表現を豊かにする。
4. 子どもに指示しながら教えていく。

立つわけであるから、よい点を伸ばすような教師側の働きかけがとくに必要である。この点は、子どもの学習意欲を高めるために基本的に必要なことであるから、教師自身の自己表現ばかりでなく、子どもの自己表現能力を高めていくことが必要である。

(No.8) 子どもに紙芝居を演ずるとき、どうすればよいでしょうか。

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%



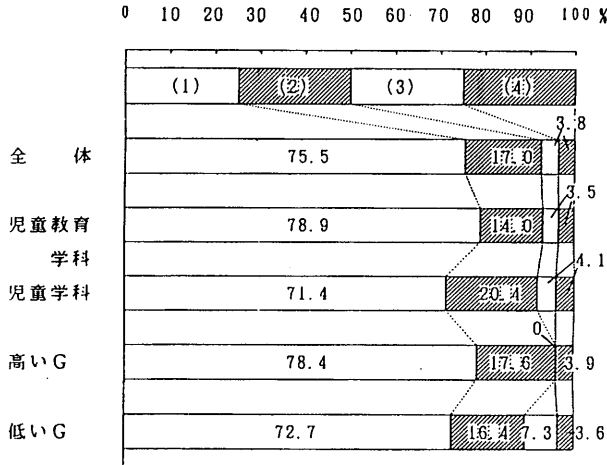
(4) は全て 0%

子どもに紙芝居を演ずるときどうするかについての質問項目であるが、紙芝居という劇作活動は色々の要素が介入するから、一例として取り上げたものである。全体分布で、“2. ことばに抑揚を入れる”が50.0%を占めている。紙芝居は言語的表現を使うので当然であるが、“1. 手ぶりなどを入れてオーバーにやる”24.5%も、

1. ことばの抑揚、手ぶりなどを入れてオーバーにやる。
2. ことばに抑揚を入れてやる。
3. 時々反応をみながらことばを読んでいく。
4. とくになにもしないで裏の文を読むだけに
5. その他

従来の紙芝居のあり方を変えていくのに必要かも知れない。紙芝居による表現活動の中に、もっと自己表現活動を加えていくようなあり方を導入することも必要ではないかと考えられる。H・GはL・Gにくらべてより積極的な反応が多い点がみられる。

(No.9) 子どもたちの反応を高めるにはどうすればよいですか。

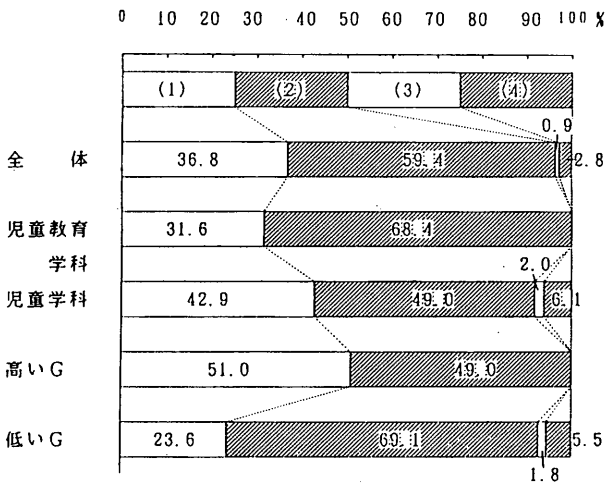


1. 表現がオーバーなほうが反応がよいと思う
2. 表現が普通程度のほうが、よい反応があると思う。
3. 表現によって、反応はさほど変わらないと思う。
4. その他

子どもたちの反応をどう高めるかについて、全体的にみてどう思うかについての質問項目である。全体分布について、“1. 表現がオーバーなほうがよい”とする反応が75.5%で圧倒的に多い。この傾向は、児教・児学、H・G・L・Gの区分について同様な傾向がみられる。要す

るに、子どもたちの色々な面の反応を高めるには、それが意図する内容をより強く印象づける働きかけが必要なのわけで、内容の訴求効果という点からみて、内容を逸脱しない範囲で、オーバーな表現が必要であることを示唆している。

(No.10) あなたの動作はどうですか。



1. 音楽が好きでリズムカルである。
2. 音楽は好きだがあまりリズムカルではない
3. 音楽は好きでないが、リズムカルである。
4. 音楽は好きでなく、リズムカルでない。

この質問項目は回答者自身の動作の傾向についての意見を問うたものである。全体分布をみて、“2. 音楽は好きだがリズムカルではない”とする反応が59.4%、次いで“1. 音楽は好きでリズムカルである”とする反応が36.8%である。しかし、H・GとL・Gとの比較において、H・Gは1.が51.0%であるのに対し、L・Gは23.6

%となっており、H・Gは自分自身の動作をリズムカルとみるものがきわめて高い。自己の行動傾向を外向的、積極的と自己評価しているグループは、動作の面でもリズムカルで、自己表現活動の傾向が高いということが問われる。

2. パフォーマンス活動場面の観察による分析の結果
パフォーマンスの重要性およびその有用性は、前述のアンケート結果から十分に意義あるものと捉えられている様子が理解される。そこで次にパイロット・スタディとして、実際の保育場面において保育者がパフォーマンスをどのように用いているか、またそれが子ども達の活動にどのような影響を与えているかという点について、実際の保育場面の観察結果をもとに考察をすすめていきたい。

観察方法：前述の方法を具体的に示すと以下のとおりとなる。三名の保育者と保育中の活動や大まかな流れを打合わせおき、プログラムに添いながらも、子どもに合わせて保育を展開するように依頼した。保育中の様子はすべてVTRに録画し、保育中の共通活動場面（4場面）における保育者のパフォーマンス、および子どもの行動をあらかじめ準備しておいたチェックリストに基づき評定した。

保育者のパフォーマンスについてのチェックリスト

- ・表現方法 — ことばや身ぶりの使い方
- ・表情の変化 — 表情の豊かさや変化
- ・子どもとの距離 — 子どもとの距離や位置関係
- ・子どもへの応答 — 子どもに回答する時の仕方
- ・活動の様子 — 子どもと一緒に活動する度合い
- ・子どもの把握 — 子どもへの注意のむけ方
- ・行動の積極性 — 子どもに関わろうとする積極度

子どもの行動についてのチェックリスト

- ・着目行動 — 保育者の行動に対して示す関心の程度
- ・活動状況 — 保育者の意図した活動への参加のしかた

以上の手続きに従い作成されたチェックリストをもとに、保育者についてはパフォーマンス水準の高いものから2点・1点・0点と各項目ごとに得点化し、パフォーマンス得点とした。また子どもに関しても行動水準の高いものから同様に2点・1点・0点と二項目について得点化し、行動の得点を算出した。

結果： 保育者が活動場面でどの程度パフォーマンスを用いているかについて示したものが表1である。

表1. 保育者のパフォーマンス得点

項目	保育者		
	A	B	C
表現の方法	8	14	9
表情の変化	8	15	12
子どもとの距離	2	5	7
子どもへの応答	2	13	8
活動の様子	2	8	6
子どもの把握	2	11	7
行動の積極性	5	12	13
計	29	78	62

保育者によりパフォーマンスを用いる程度は異なることが理解されるが、いずれの保育者の場合も評定項目の“表現の方法”“表情の変化”は高得点であった。また三者を比較すると、“表情の変化・表現の方法”と共に“子どもへの応答”や“子どもの把握”に関して保育者間のパフォーマンスの差が大きいと言える。パフォーマンスを“表現の方法・表情の変化”といった保育者自身の動作そのものの項目と、それを有効に機能させるものとしての二次的パフォーマンスともいうべき“子どもとの距離”以下にあげた項目とを関連させてみると、保育者の動作水準の高い保育者ほど、応答性が豊かであり、行動の積極性も高く、子どもの把握がよくなされている実状がうかがえる。このことから、パフォーマンスを豊かに発揮するためには、相手の行動やその場の状況の把握が良好になされることが必要である点が示唆され、パフォーマンスの充実はこれらに支えられていることが推察される。つまり、パフォーマンスの豊かさは、周囲の状況を的確に察知することが基底としてあり、言い換えれば感受性が豊かであることがパフォーマンスの推進力となっていくことが指摘されよう。

更に、保育者のパフォーマンス効果を明らかにするためパフォーマンス水準の高い保育者Bと、パフォーマンス水準の控え目な保育者Aについて、保育時の子どもの行動を比較したのが表2である。

表2. 子どもの活動得点

項目	保育者	
	A	B
着目行動	5	53
活動状況	44	56
計	49	109

この結果より、子どもの行動水準はパフォーマンスの豊かな保育者Bの場合に高いことが理解される。つまり保育者のパフォーマンスが豊かであることは、子どもの行動をより促すといえよう。また評定項目の“着目行動”と“活動状況”についてみると、“着目行動”に差が大きいことから、パフォーマンスが豊かであることは子どもの注意を喚起するのに重要な役割をになっているといえる。

また“活動状況”は“着目行動”ほどに両保育者間に差が認められないが、個々の子どもについての評定結果によれば“自発的に活動に参加する”といった高得点をマークする子どもがパフォーマンスの豊かな保育者Bの場合に多くみられたことは特徴的といえよう。

着目行動が即行動へと結びつかない点是指摘されるものの、着目行動が活動に影響を与えている傾向は推察され、着目行動はその後の活動を動機づける誘因であることは理解される。行動を動機づける一因として、子どもの注意を喚起し、興味をよび起こすことが活動を展開する原点であることを考慮すれば、着目行動の多いことは活動へのとりかかりを促し、それがひいてはその後の活動の充実につながる事が期待される。

まとめ： 以上アンケート調査の結果および活動場面の観察結果を総合すると、教育・保育においてパフォーマンスが大切である点は十分に理解されているといえよう。更に実際の活動場面における活用からはパフォーマンスの豊かさは子どもの注意を喚起し、行動を動機づけると共に、主体的な活動への取り組みを促し、充実した活動の展開をもたらすことが期待できる。

今後はパフォーマンスのより効果的な呈示方法、それに伴う教育的な効果について、対象を拡げ検討していくことに合わせて、活動場面における子ども達の行動について詳細に質的な分析を加えていきたいと考えているところである。